



# 近代文学研究叢書

## 第三十六卷

昭和47年12月15日印刷  
昭和47年12月20日出版  
昭和51年10月20日二刷

[ ¥3000 ]

|     |                                                                             |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------|
| 著者  | 昭和女子大学近代文学研究室                                                               |
| 発行者 | 東京都世田谷区太子堂一丁目七番地<br>坂本由五郎                                                   |
| 印刷者 | 東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地<br>梶原忠幸                                                  |
| 発行所 | 154 東京都世田谷区太子堂一丁目七番地<br>昭和女子大学近代文化研究所<br>振替口座 東京一七〇八六七<br>電話 代表 (〇二) 五一三一 番 |

# 近代文学研究叢書

## 第三十六卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村本宮保人浜能成中内辻玉島山佐佐笹佐坂齋木河金片荻岡太上石石池

田松間内 見 勢瀬林 井田 伯藤沢 本 藤 鱒子子桐 原 田井森田田  
坂 徳 藤村 宮 木由 俣 井 保  
澄定久秀 圓 頼正謙 幸蘆 梅幹美 一 実武健顯 泉 三磯延吉亀

夫孝雄雄都吉郎賢勝二濯鑑助二允友二明郎郎寛修英雄二智水生郎吉男貞鑑

(国語学) (近代文学) (英語学) (国文学) (美文学) (近代文学) (国語学) (英文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (国文学) (和歌文学) (俳文学) (近代文学) (比較文学) (英文学) (児童文学) (国文学) (国文学)

口 絵 写 真

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 宮 | 直 | 横 | 片 | 嘉 | 大 |
| 島 | 島 | 木 | 瀬 | 山 | 村 | 谷 |
| 霜 | 新 | 三 | 夜 | 孤 | 磯 | 繞 |
|   | 三 | 十 |   |   |   |   |
| 川 | 郎 | 五 | 雨 | 村 | 多 | 石 |

# 大谷 繞石

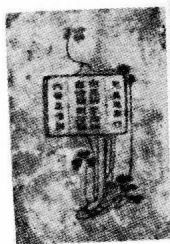
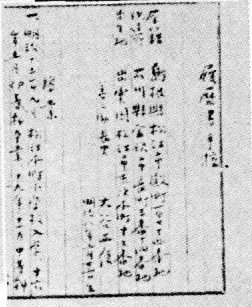
一 繞石肖像

「偉人論」一明治三十六年十月刊  
(昭和女子大学蔵)



→ 「偉人論」中の自筆覚書  
(品川力氏蔵)

中段右より



自筆履歴書(大河内喜代子蔵)

「北の国より」一 大正十一年四月刊(柳生四郎氏蔵)

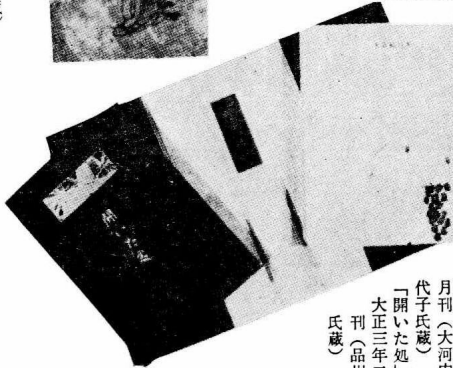
「落椿」一 大正七年五月刊(大河内喜代子蔵)

「囚徒その他廿二篇」一 大正三年三月刊(品川力氏蔵)

「智恵と運命」一 大正二年十二月刊(昭和女子大学蔵)

「恵馬遜傑作集」自然論・学者論・自持論・報償論

明治三十九年一月刊(昭和女子大学蔵)



↑ 繞石の墓

一 松江市恩敬寺

「己がこと人のこと」一 昭和八年九月刊(柳生四郎氏蔵)

「案山子日記」一 大正元年十二月刊(大河内喜代子蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

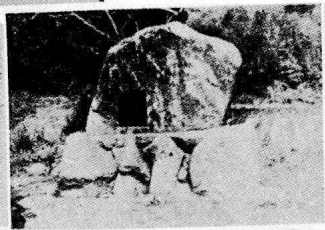
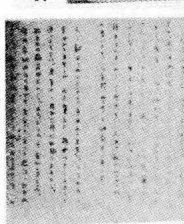
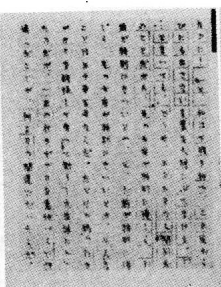
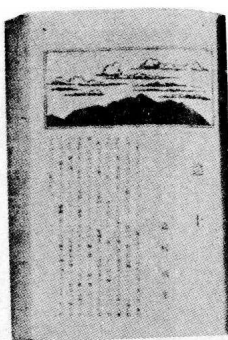
「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

「開いた処」一 大正三年二月刊(品川力氏蔵)

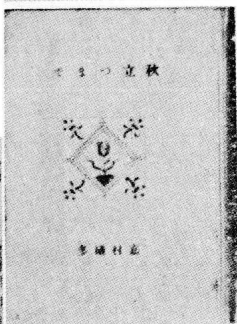
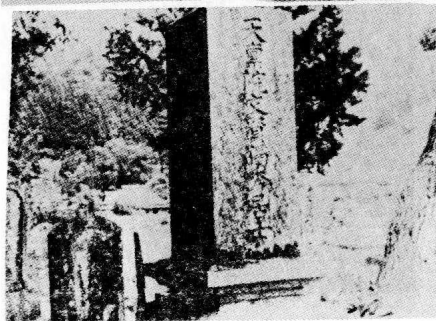
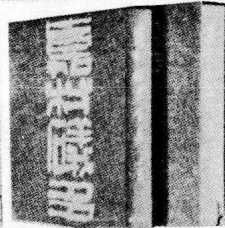
# 嘉 村 磯 多

→「途上」—中央公論  
上段右、磯多肖像

昭和七年二月号所載  
(昭和女子大学蔵)



→「途上」—昭和七年八月刊(昭和女子大学蔵)  
三段中、「嘉村磯多全集」上下—昭和三十九年十一月、四十年九月刊  
(昭和女子大学蔵)



「秋立つまで」—昭和十五年十一月刊  
(昭和女子大学蔵)

「崖の下」—昭和五年四月刊  
(昭和女子大学蔵)

←磯多の墓—山口市  
二段中、磯多の記念碑—山口市

# 片 山 孤 村

上段右—孤村肖像

中—自筆原稿「梅雨と喘息」

左「神経質の文学」—帝国文学

明治三十八年六月—九月所載

(昭和女子大学蔵)

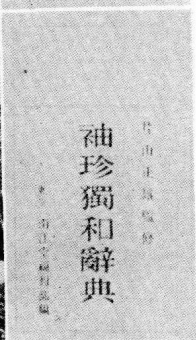
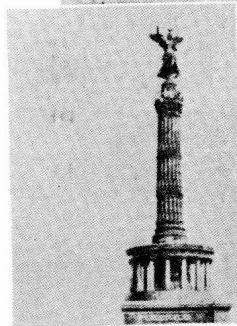
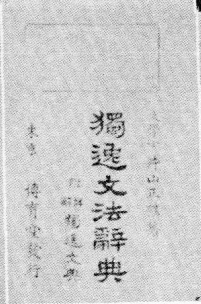
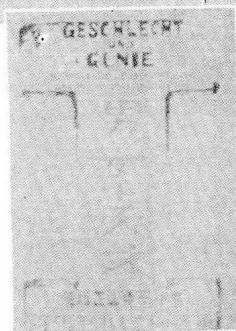
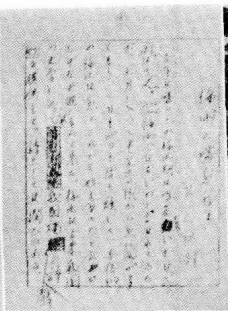
中段右—「ゲーテとの談話」—大正十四年三月刊

月刊

中—「独逸文法辞典」—大正五年八月刊

左—「男女と天才」—明治三十九年一月刊

(昭和女子大学蔵)



「都会文明乃画図伯林」—大正十二年十一月刊(昭和女子大学蔵)  
孤村の墓—多磨霊園 →

「袖珍独和辞典」—昭和六年五月刊(昭和女子大学蔵)

横 瀬 夜 雨

上段右より

夜雨肖像

「神も仏も」——文庫 明治二十八年十月号所載

「夕月」——明治三十二年十二月刊  
「二十八宿」——明治四十年二月刊

(昭和女子大蔵)

中段右より――

「夜雨集」——明治四十

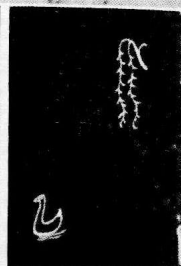
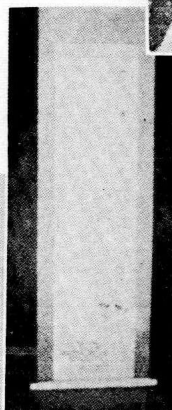
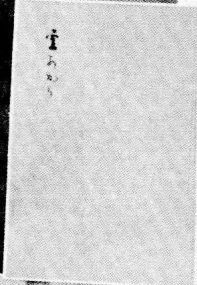
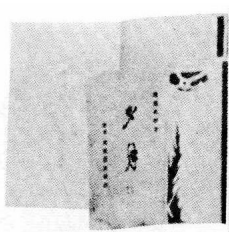
五年一月刊（昭和女子大学蔵）  
「案内状の絵文」（横瀬家蔵）

「死のよろこび」——大正四年十二月刊

(昭和女子大学蔵)

↑「太陽に近く」―昭和六年二月刊

←「近世毒婦伝」→昭和三年七月刊（昭和女子大学蔵）



→「やれたいこ」の碑―茨城県

「雪あかり」――昭和九年六月刊

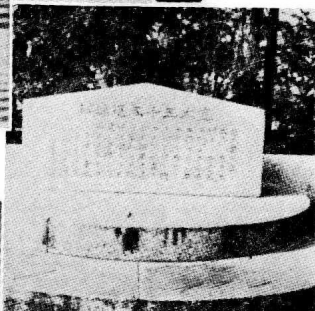
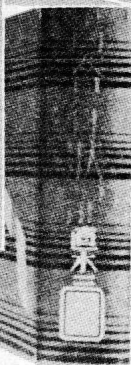
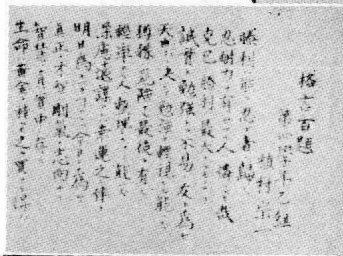
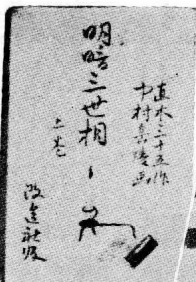
↑「花守日記」——明治三十九年七月刊

(昭和女子大学蔵)

(昭和女子大学蔵)

# 直 木 三 十 五

右「光・罪と共に」—昭和八年一月刊  
中「明暗三世相」—昭和七年九月刊  
←三十五肖像 (昭和女子大学蔵)



→「楠木正成」—  
昭和七年十一月  
刊 (昭和女子大  
学蔵)  
↑三十五の墓  
神奈川 長昌  
寺内

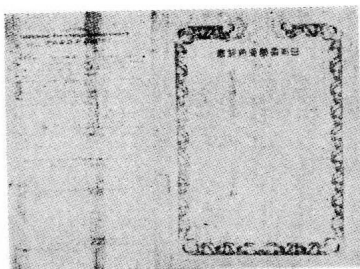
↑追悼碑—多磨霊園内  
二段右「日本の戦慄」—昭和七年六月刊  
中「青春行状記」—昭和六年十一月  
刊 (昭和女子大学蔵)  
左 三十五の筆跡—明治三十七年八  
月 (植村清二氏蔵)

# 宮島新三郎

上段右—新三郎肖像

左—留学時の旅券

(宮島トヨ氏蔵)



中段右より

「吾が日吾が夢」—大正十三年十月刊

「虹」大正十三年六月刊

「トルストイの生涯」—大正十三年九月刊

「ダーバアヴィル家のテス」—昭和四年二月刊

「大正文学十四講」—大正十五年六月刊

(昭和女子大学蔵)

三段右「明治文学十二講」

—大正十四年五月刊

左「芸術改造の序曲」

—大正十四年五月刊

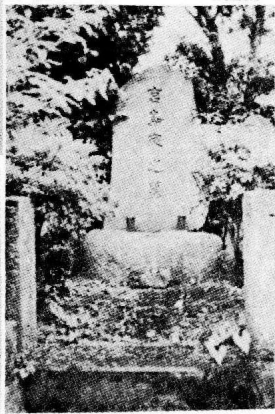
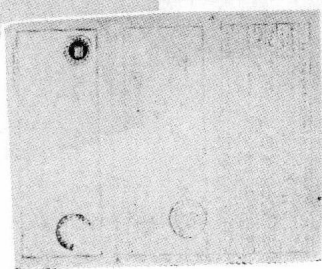
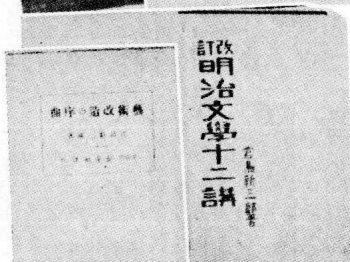
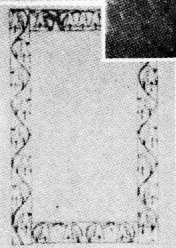
(昭和女子大学蔵)

下段右

新三郎の墓—多磨  
霊園

左 シンガポールより  
妻に宛てた手紙

(宮島トヨ氏蔵)



# 三 島 霧 川

上段右 霜川肖像

左 「廓文章」—演芸画報

明治四十二年四月号所  
載（昭和女子大学蔵）

中段右より

「埋れ井戸」—新小説 明治三十一年八月号所載（昭和女子大学蔵）

「奈美子」—明治四十四年刊（三島正六氏蔵）

「解剖室」—中央公論 明治四十年三月号所載（昭和女子大学蔵）

「役者芸風記」—昭和十年四月刊（昭和女子大学蔵）



三段右「大楠公」

—昭和十五年四  
月刊（斎藤佐治  
郎氏蔵）

中 「赤穂四十七

士」—昭和十年  
一月刊（三島正  
六氏蔵）

左 「少年日本外

史」—昭和十年  
五月刊（斎藤佐  
治郎氏蔵）

↑  
「川中島の合戦」—金の星 大正十五年八月号所載  
（昭和女子大学蔵）

# 目次

|   |          |                |
|---|----------|----------------|
| 口 | 第三十六卷の成立 | 昭和女子大学研究室：(一二) |
| 凡 | 例        | 昭和女子大学編集室：(一九) |
| 大 | 谷 縉      | 近代文学研究室：(二一)   |
| 嘉 | 村 磯      | 近代文学研究室：(七一)   |
| 片 | 山 孤      | 近代文学研究室：(一一)   |
| 横 | 瀬 夜      | 近代文学研究室：(一五)   |
| 直 | 木 三      | 近代文学研究室：(二〇九)  |
| 宮 | 島 新      | 近代文学研究室：(二七九)  |
| 三 | 島 霜      | 近代文学研究室：(三三七)  |
| 近 | 代 芸      | 近代文学研究室：(三八一)  |
| 末 | 文 年      | 近代文学研究室：(四二九)  |
| 付 | 記        |                |

## 第三十六巻の成立

本巻は昭和期第十一巻として、昭和八年十一月から昭和九年三月までに歿した左記七名の研究調査を収めた。

大谷繞石は俳人。本名正信。明治八年（一八七五）三月二十二日、松江市末次本町十三番地に父善之助、母タルの長男として生まれた。松江中学四年の時（明<sup>23</sup>）、ラフカディオ・ヘルンが英語教師として同校に赴任してきたことが、繞石とヘルンの出会いの最初でそれ以来繞石はヘルンを敬慕し、ヘルンまた繞石を弟子としてその語学力をみとめて特別に可愛がった。第三高等学校、第二高等学校を経て東京帝国大学文科英文科に進んだが、この間虚子、碧梧桐、阪本四方太らと級を同じうした。大学卒業後は就職の容易な教育界に入ることになり、土井晩翠の斡旋による郁文館中学の講師を皮切りに教員生活を送り、その間雑誌「新文芸」を発刊、三十五年十一月真宗大学教授として東京に戻ったが、三十七年ヘルンが死去、「明星」「新文芸」などに恩師の死を追悼した。三十八年東京大学の講師を経て四高教授となり文部省の命による英国留学（明<sup>42</sup>）満二年で帰朝後は広島高等学校教授に転じた。俳句に入ったのは二高在学中といわれ、作風は明快（子規評）で新傾向をおびるが、碧梧桐の鋭さはなく大まかな味わいをもつ。著書に留学の見聞録「（滯英）二年案山子日記」、小品隨筆紀行文

集「北の国より」等がある。昭和八年十一月十七日病歿、享年五十九歳。

嘉村磯多は小説家。明治三十年（一八九七）十二月十五日、山口県吉敷郡仁保村大字仁保上郷村に父若松、母スキの長男として生まれる。生家は山峡の大地主で裕福であった。県立山口中学在学中寄宿舎生活で下級生制裁のため停学処分を受ける。四年で中退、両親との不和の中に暗い家庭生活を送り救いを信仰に求めて綱島梁川の著書に親しみ深く傾倒した。大正十年、水守亀之助の紹介で同人誌「十三人」の同人となり文学への志を固める。その後安倍能成、近角常観らにも師事。妻子を捨てて東京に出奔した彼は十五年二月中村武羅夫の知遇を受け「不同調」の記者となり処女作「業苦」を、ついで「崖の下」を同誌に発表、文壇の注目を浴びた。その後「近代生活」はじめ諸誌につきつぎ作品を発表、反マルクス主義を標榜した「十三人倶楽部」に参加。代表作となった「途上」（中央公論 昭・七）に好評を博し作家としての不動の地位を得た。その作品はすべて自己並びにその身辺に取材した私小説で、自虐的な告白懺悔の文学であった。昭和八年十一月三十日結核性腹膜炎の為に死去、享年三十六歳。

片山孤村はドイツ文学、ドイツ語学者。本名正雄。明治十二年（一八七九）八月二十九日、山口県佐波郡船路村二十七番地に、父敦助、母タケの次男として生まれた。明治二十九年山口高等学校大学予科第一部に入学。上

級には河上肇がいたが、当時ドイツ語を教えていた登張竹風から「何れ劣らぬ秀才」と折紙をつけられ、小論文「ゲーテのウェルテールについて」は竹風の激賞を得た。三十五年東京帝国大学文科独逸文学科を優秀な成績で卒業するや鹿児島の高造士館教師（明35）、学習院教授（明37）、第二高等学校（明39）、第三高等学校（大3）を経て大正十四年秋九州帝大法文学部独逸文科教授となり、生涯教職に奉じた。その間「帝国文学」などに「神経質の文学」（明38・6）「続神経質の文学」（明38・12）としてドイツの近代象徴詩篇を紹介、又ワイニンゲルの「性及び性格」を「男女と天才」（明39）として翻訳出版、又四十一年には「最近独逸文学の研究」（博文館）を出版するなど自然主義末期以後のドイツ文学を論じたが、後ドイツ語学に力を注ぎ「独逸文法辞典」（博文堂・大5）「双解独和大辞典」（南江堂・昭2）「改造独逸文法辞典」（有朋堂・昭6）「袖珍独和辞典」（南江堂・昭6）などドイツ語に関する辞書の著作により語学界に貢献するところが大きかった。昭和八年十二月十八日、五十五歳を以て持病喘息の為に死去した。

横瀬夜雨は詩人。本名虎寿、別号利根丸、宝湖。明治十一年（一八七八）一月一日、茨城県真壁郡横根村七番屋敷に、父忠右衛門、母波満の次男として生まれた。代々名主で豪農の家に不自由なく育ったが、三歳の時に脊椎を病み、手当ての効なくそのまませむしとなって暗い生涯を送った。幼少から病床と本に親しみ、詩の世界に慰めを求めて詩作に励んだ。作品の発表は主として雑誌「文庫」により、明治二十八年十一月掲載された

「神も仏も」は「反響をよんで、一躍新進詩人として脚光を浴びた。抒情的作風から移行して筑波の風土に密着した夜雨独特の詩風を生むに至り、民謡風な作品も書いた。三十二年十二月、処女詩集「夕月」を出版、そのあとを受けた第二詩集「花守」(明治三十八刊)は地方色豊かな作品で筑波根詩人といわれた。「やれだこ」「富士を仰ぎて」などの秀作がある。同じく詩集「二十八宿」にも「野に山ありき」「お才」など世評を呼んだ作品をおさめ、その作風は純真、多感な抒情詩で、不具ゆえにもつ女性への異常なまでの憧憬と、自分の失恋によるはげしい苦悶を感覚的に表現して、世の文学青年を魅了した。河井醉茗、伊良子清白と並んで「文壇の三羽鳥」と称された。詩作の他に短歌、随筆にも力を注ぎ、「近世毒婦伝」「花守日記」「死のよろこび」などがある。昭和九年二月十四日、五十七歳の生涯をとじた。

直木三十五は小説家。本名植村宗一。明治二十四年(一八九二)二月十二日、大阪市南区内安堂寺町に父惣八、母静の長男として生まれた。家業は古着商だったが父は学問好きの飄々とした風格の人だった。早稲田大学を中退。種々の職業についたが、大正七年友人と「春秋社」をおこし、「トルストイ全集」を企画、出版して大いに当てた。続いて雑誌「新潮」を創刊して彼自身文学や美術の翻訳、評論などを執筆、中里介山の「大菩薩峠」を紙上ではじめて賞めた。大正十年、里見弴、吉井勇らによる同人雑誌「人間」を受継いだ。この頃最も経済的に窮迫して苦しんだ。大正十二年一月、菊池寛による「文芸春秋」が創刊されるや匿名で文壇ゴ